

Title	新出土資料関係文献提要(十)
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 162-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61042
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新出土資料関係文献提要(十)

草 野 友 子

の四つに分類する。 楚竹書 (上博楚簡) 前回同様、 された「新出土資料関係文献提要(九)」の続編である。 |原釈文」||工具書」||研究書(中文書)」||研究書(和書)] 本提要は、『中国研究集刊』金号(総四十六号)に掲載 郭店楚墓竹簡 に関する文献を主対象とした。 (郭店楚簡)・上海博物館蔵戦国 以下、

の五篇が収録されている。「図版」(写真版)と「 作』『鄭子家喪』『君人者何必安哉』『凡物流形』 第六分冊は提要(九)で解説済み)。本巻には、『武王践 は提要(四)、第四分冊は提要(六)、第五分冊は提要(八)、 の第七分冊(第一分冊・第二分冊は提要(一)、第三分冊 『呉命』 釈文考

上博楚簡の図版

(写真版)と釈文考釈とを収載した書

釈」との二部よりなる。

器物に自戒の銘を刻むという内容である。 尚父(太公望)が武王に丹書の言を告げ、 することから、「武王践阼」と名付けられた。 十五簡。 『武王践阼』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。 篇題はなく、『大戴礼記』武王践阼篇と多く重複 武王が様々な 本篇は、

に基づく仮称である。本篇は、鄭の子家の死をめぐって、 本・乙本があり、 『鄭子家喪』の原釈文担当者は、 いずれも全七簡。 陳佩芬氏である。 篇題はなく、冒頭句 甲

原釈文

海古籍出版社、 『上海博物館蔵戦国楚竹書(七)』 二〇〇八年十二月、三二五頁、 (馬承源主編、 縦組繁体 F

字

禁 と両棠で戦 $\tilde{\sigma}$ ・荘王が鄭を包囲するに至 大勝するという内容である。 り、 さらに鄭を救 援した晋

本篇は、 る 諫言するという内容であ 本文に見える君王に対する諫めの言葉を篇題としている。 甲本・乙本があり、 "君人者何必安哉!" 君王 (楚の昭 王 Ø いずれも全九簡。 原釈文担当者は、 に対して、 范乗 篇 濮茅左氏 (范無字) 題はなく れであ カミ

篇題 本 • め みで答えはない。 九章で構成され、 て似ている。 は、 乙本があ "凡物流形』 甲本第三簡背面に b, の原釈文担当者は、 その体裁と性質は、『楚辞』天問篇 多く「問之曰」より始まるが、 甲本は全三十簡、 「凡物流 曹錦炎氏であ 形」とある。 乙本は全二十二簡。 問 本篇 る ع ٧ì 。 の 甲 は 極

晋君 二章に分けられる。 から離れさせた、 臣 国 無題は、 『呉命』 下が は臣下を派遣して呉国と交渉し、 |の国境内に至って晋国に恐慌を引き起こしたため、 記 に載とおおむね一致する。 2労を周天子に告げるという内容であり、 第三簡背面に の原釈文担当者は、 という内容である。 第一 「呉命」とある。 章は、呉王が軍を率いて北上し、 曹錦炎氏である。 第二章は、 ついに呉軍を陳国 本篇はおおよそ 全九 「国語」 呉王派 簡

陳

篙

 σ

な 武王践阼』 には現行本 『大戴礼記』 武王 践作篇

> 形』には甲本・ との 末尾に付されている。 女 照 表が、 乙本の対照表 『鄭子家喪』 が、 君 人者何必安哉 それぞれの 「釈文考釈 凡物 流

の

工具書

_ 簡牘帛書通仮字字典』(白於藍 藊 福 建 八民出版

社、

二〇〇八年一月、

四二五頁、

横組繁体字

九店楚節、 通 仮字に関する字典。 及び上博楚簡 楚帛書、 (第一分冊 信 から第五分冊 陽楚墓、 郭店 まで 楚 簡

中

-の通仮字を集めている。

簡 が と該当箇所の一文とを掲げる。 仮関係にあることを示した後、その文字が見える文献名 している。 分冊 提示され 三十の韻部に分類して排列し、 排 列 いら第五分冊まで)の原釈 案が採用され 「〇与×」という形式で「〇」「×」 ている場合は、 てい . る。 著者が最 郭店楚簡・上博楚簡 文の竹簡 各声系毎に文字を提 も妥当と見なした竹 排列案に異説 双方が通 (第 示

索引 頭 気には 「筆画検字表」 「篇名対照表」、巻末には を付す。 「主要参考文献 條

目

う。 り、 文字の诵 準の一つが 今後の新出土資料研究において必携の工具書となろ Ш 干 _資 2仮関係を容易に確認することができる字典であ ′涌 (料研究において、文字を確定する際 で仮字である。本書は、 新出土資料における の 判 断 基

古籍出版社、二〇〇八年八月、一六四八頁、 『古文字類編(増訂本)』上・下(高明・涂白奎編 北京大学震旦古代文明研究中心学術叢書特刊、 横組繁体字) 上海

である。

その中には、郭店楚簡や上博楚簡(第一分冊・第二分冊 字類編』(高明編、 の文字も含まれる 古文字に関する字書。一九八〇年に刊行された 近年出土した文献の文字が新たに追加されている。 中華書局)を大幅に増訂 したものであ . 『古文

他文字」「説文」の四項目に分け、それぞれ該当する文字 見られる絵のような文字)の三編で構成されている。第 (合体文字)、第三編「未識徽号文字」(甲骨文や金文に 編「古文字」では、各字について、「甲骨」「金文」「其 本書は、第一編「古文字」(単体文字)、第二編 「合文」

> 文字」の三項目に、第三編「未識徽号文字」では、 れている)。第二編「合文」では、「甲骨」「金文」「其他 它刻辞」「秦篆」となっていたが、 を掲載する(増訂前は「甲骨文」「銅器銘文」「簡 本書では表記が 変更さ 書及其

今後の古文字研究・新出土資料研究にとって非常に有益 究の基本書である。今回その増訂版が刊行されたことは 文」「青銅器銘文」の二項目に分けられている。 巻末には、「引書目録」「引器目録」「検字表」を付 『古文字類編』 は、様々な古文字を収録した古文字研

出版社、二〇〇八年十月、一三五九頁、 楚系簡帛文字編 (増訂本)』(滕壬生著、 縦組繁体字 湖北

_

版社、 簡第一分冊・第二分冊、及び香港中文大学文物館 新たに九店楚簡、 出土した竹簡 ○字を集めた『楚系簡帛文字編』(滕壬生著、 楚系文字に関する字書。 一九九五年七月) 竹 郭店楚簡、 牘・楚帛書上 を再編・ 湖北省 新蔡葛陵楚墓竹 の墨書文字、 増訂したもの 湖 南省 湖北 簡 河 であ 南 和教育出 一蔵簡 上博楚 九二五 省 より 牘

て見ていてはりた。)にしましば、これである。竹簡の本書は、単字、合文、附録の三部構成である。竹簡のの戦国楚文字を増加し、計四九○五四字を収録している。

文字の記列は、『楚文字扁』(李宁至扁贅、善東市竜大隷定できないものは附録に収められている。 欠損により不鮮明なものは収録せず、音義不明のものや

画 順に掲げる。 字を含む)は四六二一個。 同 学出版社、 称と竹簡番号) と辞例 書体を掲げ、 文字については字形によって配列している。 [検字表」を付す。 巻頭には「引用資料全称・簡称及出処表」、巻末には「筆 文字の配列は、『楚文字編』(李守奎編著、 『説文解字』の順序とし、『説文解字』に見えない 二〇〇三年十二月。 各楚系文字の下には、 枠内に小篆、 (該当箇所の一文)とを記載する。 隷定された文字、楚系文字の 記載形式としては、 提要(五)で解説済 その出処(文献の略 字頭 華東師 枠外に楷 (異体 み 範 大

に役立つ一書である。 戦国楚簡を中心とした新出土資料を釈読する際に、大い戦国楚簡を中心とした新出土資料を釈読する際に、大い本書は、楚系文字を多数収録した大型の字書であり、

研究書(中文書)

『郭店簡与上博簡対比研究』(馮勝君著、中国語言

一八頁、横組繁体字)文字研究叢刊(第二輯)、綫裝書局、二〇〇七年四月、

五

篇」「国別篇」の三部構成であり、主に文字学の観点から郭店楚簡・上博楚簡に関する研究書。「形制篇」「文本

検討を加えている。

続いて、戦国時代の竹簡の製造方法、竹簡に抄写する方冊から第五分冊まで)の各文献の竹簡形制を概説する。「形制篇」では、まず、郭店楚簡・上博楚簡(第一分

収巻について解説している。 法、一つの竹簡に収められている文字数、編聯、篇歴

の、文字と文義とを対比している。また、郭店楚簡「文本篇」では、郭店楚簡『緇衣』と上博楚簡『緇本』と上博楚簡『緇

対比、本文の対比を行っている。自命出』と上博楚簡『性情論』との本文の復原、章序の

ているもの) る。 竹簡を全て 「用字不同」(同じ文字を表すのに異なる字体が用いられ 〜三及び上博楚簡 そして、 国別篇」 「楚簡」と称してよいかという問題 の対比を行う。その結果、これらの文献 では、 郭店楚簡『唐虞之道』『忠信之道』『 楚地出土の戦国簡や楚人が 『緇衣』について、 偏旁・文字形体・ ?抄写 を提起す 語 叢 した

斉系文字の特徴を有した抄本であるという結論が提示

衣

性

ħ れてい

るが、 郭店楚簡『五行』 文・三体石経古文与戦国文字対比表」「所有様本統計 れていることを指摘し、『五行』は楚人による抄本ではあ 一~三以及上博 巻末には、「郭店《唐虞之道》・《忠信之道》・《語 録 楚文字の抄本ではないとの結論に達している。 談 《談郭店簡《五行》篇中的非楚文字因素」では、 《緇衣》 中に楚系文字とは言えない文字が含ま 与楚簡偏旁対比表」「《説文》古 表 |養|

合的に比較・検討している点に特徴があり、 「典型様本統計表」「《説文》 本書は、 郭店楚簡と上博楚簡とを文字学の観点か 古文総表」を付す。 新出土資料 ら総

提示したりしている。

研究における一つの研究手法を提示している。

訳注研析叢書P027、 《上博楚竹書》 二〇〇八年一月、 文字及相関問題研究』 二八六頁 蘇建洲著、 横組繁体字 万巻楼図書股 一田 份 出土文献 有 服

ŋ 「《上博楚竹書》文字資料運用及相関文字考釈」「以古文 角度討 |博楚簡 主に文字学の観点から検討を加えている。 論 に関する研究書。 《上博楚竹書》 「《上博楚竹書》 文本来源」 の三部 字詞 |構成であ 上博楚簡 東釈」

> 字だけでなく他の古文字資料も用いて検討してい 第一分冊 から第六分冊の文献を研 究範囲とし、 文

0)

中で、 を抽出し、それぞれ詳細に検討を加えている 「《上博楚竹書》 原釈文や諸研究者の解釈に疑問がある文字や語 字詞東釈」では、 上博楚簡所収文献 \mathcal{O}

できなかった文字を解明したり、 新の成果を用いて再検討することにより、これまで解 文」の中のいくつかの文字について、上博楚簡研究の最 「楚銅貝」「西周金文」「戦国金文」「楚簡文字」「伝鈔古 「《上博楚竹書》 文字資料運用及相関文字考釈」 従来とは異なる解釈を で は

されたものであると指摘している。 に、 玉 て、 上 かという点について、 『昔者君老』『孔子見季桓子』の中に、斉や魯といった他 [の文字の特徴を有した字体が含まれていることを理由 |博楚簡はどこの国の文献を底本として抄写されたも 上博楚簡『周易』『曹沫之陣』『鮑叔牙与隰朋之諫 これらの文献は楚以外の国の文献を底本として抄写 「以古文字的角度討論《上博楚竹書》文本来源」では 文字学の角度から分析する。 そし

書である。 たものであ 本書は、 ŋ́, 著者による近年の楚文字研 今後の文字学研究におい 究の て参考となる 成 果を

〇八年八月、 書PO 出土 2 8 文献 三五三頁、 与先秦儒 郭梨華著、 横組繁体字 道哲学员 万巻楼図 書股 (出 土文献 份有限 弘公司 訳注研 析 叢

第一編「総論」では、まず「出土文歌与先秦哲学架党」第四編「出土文献与先秦儒道哲学論題」の四編で構成さ第四編「出土文献与先秦儒道哲学論題」、第三編「出土文献与先秦検討している。第一編「総論」、第二編「出土文献与先秦検討している。第一編「総論」、第二編「出土文献与先秦検討している。第一編「総論」、第二編「出土資料と伝郭店楚簡・上博楚簡に関する研究書。新出土資料と伝郭店楚簡・上博楚簡に関する研究書。新出土資料と伝

という二つの概念について考察する。論題とする「文」と、孔子・老子以後に重視された「情」源与本原之探究」では、先秦の儒家・道家が共に重要なにおいて研究方法を提示する。続く「中国哲学問題的起第一編「総論」では、まず「出土文献与先秦哲学探究」

及び戦国時代の道家における哲学的論題について検討し子』の後学の発展状況、道家と古代天文学の関係、『恒先』子』中の「損―益」観、『老子』と黄老思想との関連、『老道家に関する文献、特に『老子』『恒先』を取り上げ、『老第二編「出土文献与先秦道家哲学論題」では、先秦の第二編「出土文献与先秦道家哲学論題」では、先秦の

ている。

中の「五行」について考察し、続いて『五行』における 佚書である郭 を明らかにしている。 文献との比較を通して、 とについて分析する。また、『性情論』(『性自命出』) 及び上博楚簡『性情論』とを取り上げる。 の「情」に着目し、『中庸』や『礼記』楽記篇などの伝 「徳之行」の哲学的意義を明らかにする。 (馬王堆帛書『五行』も含む)における「徳」と「色」 第三編 「出土文献与先秦儒家哲学論題」では、 店楚簡 『五行』と、 孔子の後学が説く「情」 郭店楚簡 さらに、『五行』 まず、『五行』 性 自 の性 儒 家の 中

点に特色がある。 重要語句を取り上げて、詳細に比較・検討を行っている本書は、新出土資料と伝世文献とに共通して見られる

029 郭 店 / 楚簡 謝君直 儒家哲学研究』 著 万巻楼図書股份有限 (出土文献 公司 訳注 研 二〇〇八 析叢書P

三三〇頁、

横組繁体字)

行』『窮達以時』『六徳』である。 ている。 店 一楚簡 主に取り上げられている文献は、 12 |関する研究書。 全六章、 附 録二 『緇衣』『五 篇で構成さ

第六章

「結論」では、以上の検討を総括した上で、

現

衣』と『礼記』緇衣篇との異文の比較を通して、 かりが注目されてきた「緇衣」を再検討し、郭店楚簡 で『子思子』の一篇である可能性や子思学派との関連ば 派という観点からの検討には限界があることを指摘する。 の儒家系文献研究の成果を概説し、 における「礼」 第二章「〈緇衣〉 第一章 観念を追究する。 「導論」において、 異文詮釈及其儒学意涵」では、これま これまでの 子思あるいは思孟学 郭 「緇衣」 店 楚簡

12 ける人道思想に着目し、 『五行』とを比較して、 ついて言及している 第三章 章 一簡帛 「〈窮達以時〉 (五行) 所蘊含的義命問題」 的人道思想」では、『五行』 そこに含まれる人道思想の 馬王堆帛書『五行』と郭店)異同 一楚簡 に お

を

では、

窮

幸

のどちらが適切であるかを検討している。 れ 以 てい 一時 るー における 義命合一」と「義命分立」とい 「義命」 につい て、 先行研 う異なる 究にて提 示さ 釈

観念及び服喪の原則について考察する。 徳』における六徳と六位・六職との関係、 第五章「(六徳) 的徳性観念及其実践原則」では、 一仁内義外」 一六

代における儒家哲学の意義について論じている 巻末には附録として、二〇〇八年が『郭店楚墓 竹 簡

究現況述評」、既発表の著書や研究論考を一覧にした 楚墓竹簡》 刊行の十年目に当たることから、その間に行われた思想 研究を文献毎に概括し、 出版十週年 (1998-2008) 之思想研 問題点を浮き彫りにした「《郭店

店楚墓竹簡研究資料目録」を付す。

究の状況を知ることができる資料として、 まり注目され る。 備えている。 本書は、 また、 郭 てい 店楚簡 本書の附 なかった観点からの検討を主に の儒家系文献を対象として、 録部 分は、 これまでの郭 充実し 店楚簡 た内容 行 従 来 0 て あ

0 3 _ ۲ |博楚簡与先秦思想| 二〇〇八年九月、 浅野裕 一著、 佐藤将之監訳、 、二四四頁 (出土文献訳注研 横組繁体字 万巻楼図 書 祈析 脮 叢 書 P 份 有 够 Ō

博楚簡 之道』『曹沫之陳』『君子為礼』『鬼神之明』『競建内之』 に関する論考を収録する。 『鮑叔牙与隰朋之諫』『姑成家父』『競公瘧』『天子建州』) 上博楚簡に関する研究書。 の第四 1分冊 ・第五分冊 全八章で構成され、 第六分冊所収文献 主に上 (『相邦

子建 豫二、 与隰 ĮΠ 的兵学思想」、第三章「〈君子為礼〉 毎 σ]章「〈鬼神之明〉与《墨子・明鬼》」、第五章「〈鮑叔牙 まず、 ?の個別研究が行われている。 各章の題目は以下の通り。 現状が報告されている。 |朋之諫〉的災異思想」、第六章「〈姑成家父〉中的 章「〈相邦之道〉的整体結構」、 第七章「〈競公瘧〉的為政与祭祀咒術」、第八章「〈天 「自序」において、 的北斗与日月」。 第一章から第八章では、 日本における新出土資料研究 第二章「〈曹沫之陳〉 与孔子素王説」、第 文献

弘編 み)、『竹簡が語る古代中国思想(二) -書掲載論文の日本語版は、『上博楚簡研究』 汲古書院、 二〇〇七年五月。 提要 —上博楚簡研究—』 (九) で解説済 (湯浅邦

> (浅野 裕 編 汲古書 院 汲古選書、

本提要にて後述) に収録されている。

第二分冊・第三分冊) で解説済 万巻楼図書股份有限公司、二〇〇四年十二月。 書以外には なお、 み 著者による戦国楚簡研究の中 『戦国楚簡研究』(浅野裕一著、 が あり、 に関する論考を掲載している。 郭店楚簡と上博楚簡 国 語版として、 佐藤将之監訳、 提要 <u>五</u> 本

研究書 和 書

月 簡研究班編、 -上海博楚簡の 二三六頁 大東文化大学大学院事務室、 縦組和文) 研究 (二)』(大東文化大学上海 --00 博 椌

三月) 竹書 (三)』(馬承源主編、上海古籍出版社、 をまとめたものである。 上 |博楚簡 所収の『周易』を用いている。 『周易』に関する訳注書。 底本には、『上海博物 大学院ゼミの成 二〇〇四年 館蔵 戦 国 楚

いて論じた著書・雑誌論文・インターネット論文などを まず、 |次列記する(掲載されている論著は、二〇〇七年十二 「関係論著目録」として、 上博楚簡 「周易」 に 0

順

月までのもの)。

大畜卦 六簡 L1 各卦毎に、「本文」「訓読」「口語訳」「注」で構成されて 、 る 次に、 こから第二十九簡まで 頤 上博楚簡 掛・ 咸卦・ 一周 恒卦)の訳注を掲載する。 易 (随卦 訳注 ・蠱卦・復卦・无妄卦・ 「その2」として、 訳注は、 第十

ることを期待したい。
究する上で有益な資料となる。今後、継続して刊行され阜陽漢簡本等との比較もなされているため、『周易』を研本書は、「注」が非常に詳細であり、通行本・馬王堆本・本書は、「注」が非常に詳細であり、通行本・馬王堆本・

需挂 院事務室、二〇〇七年三月) (大東文化大学上海博楚簡研究班 なお、 「その1」として、 訟卦・ 本書の前巻に当たる『上海博楚簡の研究 ている 師卦・比卦・大有卦・謙卦・ (提要 (九) 第一簡から第十五簡まで で解説済み)。 には、 編 上博楚 大東文化大学大学 豫卦)の ん簡 『周 '(蒙卦 訳 易 (|) 注が 訳

る思考が見られることを指摘する。

> もに、 的性格を明らかにしている。 博 説かれる君主の為政と祭祀呪術との関係を考察するとと における為政と祭祀呪術」(浅野裕一)は、『競公瘧』に 本文献における こは、 (浅野裕一)では、『天子建州』には礼と天体とを結合す 产楚簡 の成果である。 第三章「上博楚簡『天子建州』における北斗と日月」 博楚簡 章「上博楚簡『姑成家父』における百豫」(浅野裕 古代思想史上に占める位置についても検討し の第五分冊・ 晋の三郤が登場する『姑成家父』を取り上げ、 に関する研究書。 云百 全十章、 豫」の意味を考察した後、 第六分冊に関する論考を収 附 第二章「上博楚簡 篇二 戦国楚簡 篇で構成され 研 究会」 『競公瘧』 録する。 の その文献 共同 主に上 研

等を明ら れ文献 問鄭寿』における諫言と予言」 献を取り上げている。 t 王や太子に 王與王子木』—」(湯浅邦弘)、第六章「上博楚簡 查 予言」」(湯浅邦弘)、 第四章から第六章では、上博楚簡中の楚王 「戦 の |国楚簡と儒家思想|| 釈 か 対する教戒の書であったと推測 『読を行った上で、その文献の特質や著作意図 にしている。 第四章 第五章「太子の そして、これらの 「上博楚簡 君子」 (湯浅邦弘) の意味 知 —上博 してい 文献 では、 「荘王既 に関する文 は、 楚 √ る。 (湯浅邦 それ 成成 平王 簡 楚の 亚 0

弘 "従政』を手が は、 上博楚簡『孔子見季桓子』『君子為礼』『弟子問』 かりに、 儒家思想における「君子」に \sim

録―」(福田哲之)は、 いて再考している 第八章「上博楚簡『弟子問』考釈―失われた孔子言行 拼合・編聯による残簡 の復原と、

楚簡 楚簡 対する称呼―」(福田哲之)では、『弟子問』と他 ることにより、『弟子問』の文献的性格を明らかにしてい 『弟子問』全体の釈読・考証を行う。 『論語』との比較による内容・構成の分析とによって、 の儒家系文献とにおける孔子に対する称呼を比較す 『弟子問』の文献的性格―上博楚簡に見える孔子に 続く第九章 心の上博 ·「上博

指摘してい 時期との関連から、 健二)は、『慎子日恭倹』の文献的性格や上博楚簡の成立 第十章「上博楚簡 「慎子」が慎到とは考えがたいことを 『慎子曰恭倹』 の文献的性格」 (竹田

戦国 楚簡『孔子見季桓子』1号簡の釈読と綴合」(福田哲之)、 いう内容の論考、 「上博楚節 附篇には、 一
楚
簡 「字書」に関する重要な報告を掲載する(「上博 「字書」に関する情報」(福田哲之))。 残簡同士を綴合して竹簡の復原を試 及び上海博物館が刊行を予定している いみると

年書は、

日本

- 国内において上博楚簡の第六分冊

の

研究

成果をいち早くまとめた研究書であり、 の新出土資

料研究の活性化に寄与する一書となろう。

なお、

一分冊・第二分冊所収文献を主に取り上げたものに、『竹

「戦国楚簡研究会」の成果として、上博

楚簡 の第

汲古書院、 簡が語る古代中国思想――上博楚簡研究―』(浅野裕一編) たものに、『上博楚簡研究』(湯浅邦弘編、 第三分冊 二〇〇五年四月。 第四分冊・第五分冊所収文献を主に取り上げ 提要(七)で解説済み)、 汲古書院、

○○七年五月。提要 (九) で解説済み) がある。

付記

究員奨励費)による研究成果の一部である。 本稿は、 平成二十年度日本学術振興会・ 科学研究費 莂